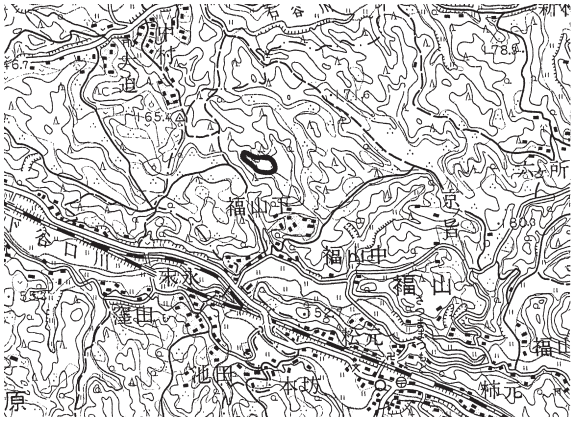
166

フミカキ遺跡

（日置郡松元町福山）



第１図　フミカキ遺跡の位置

位置と環境

薩摩半島のほぼ中央に位置し，浸食谷が入り込んだ複雑な地形の中の標高170mの台地上に立地する。

調査の経緯

調査は，南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴って，県教育委員会が平成６年（1994年）10月～平成７年（1995年）６月にかけて発掘調査を実施した。

遺構と遺物

フミカキ遺跡の台地を利用して人々が住んだのは，縄文時代早期が主であり，地点を少しずつ変えている様子が窺える。

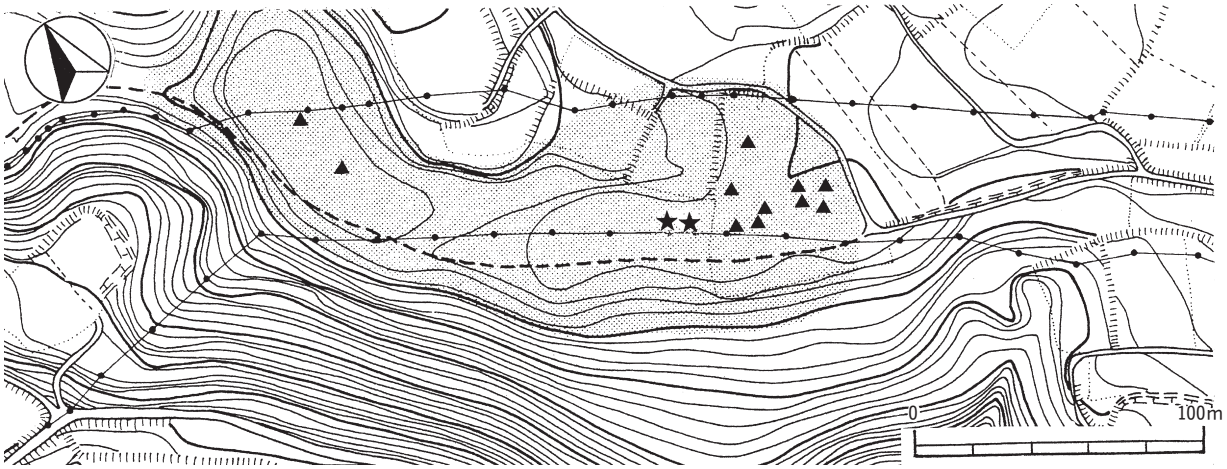
最も古いのは，縄文時代早期前半の吉田式土器が使われた時期であり，それに伴う遺構も検出された。出土層位は，Ⅳ層下部からⅤ層にかけての層である。遺構には２基の連穴土坑と１基の掘り込みがある。連穴土坑は長さ185cm，幅50cm，深さ30cmであり，連結部分は崩壊していた。埋土に焼けた土や炭が混じっていたことから，火を使用した施設である連穴土坑であると判断した。土器が集中した地点で検出されたことから，生活に密着した施設と考えられる。遺構内で吉田式土器と大分県に標識遺跡がある政所式土器が共伴して出土した点は，両者の同時性を示す重要な発見である。掘り込みは150cm×60cmの楕円形を呈し，一方の壁際からさらに深さ60cmの小穴がのびている。土器が出土する地点から少し離れており，埋土の色調から吉田式土器が使われる前後の時期に山芋や葛の根を掘った痕跡ではないかと思われる。

縄文時代早期前半の石坂式土器が多数出土したのは，吉田式土器が出土する地点から約30m離れた所である。出土した層位は，Ⅳ層下部のみであり，吉田式土器が出土するⅤ層とは，明らかに層位を異にする。「石坂式土器は吉田式よりも古い」という考えもあるが，この遺跡での層位的な出土状況からは，石坂式土器は吉田式土器よりも新しいということが明らかとなった。

石坂式土器とそれほど時間を置かずに生活したのは，西側の独立した台地突端部分であり，円筒形条痕文土器と呼ばれる中原式土器を主体とする人々である。集石３基も検出された。

早期の段階で一番最後に生活したのは，縄文時代早期中半の押型文土器の時期である。押型文土器に伴う集石は７基検出された。

このように，縄文時代早期のフミカキ遺跡は約千年もの間に入れ替わり立ち替わり小さな集落が営まれていたことが明らかとなった。また，縄文時代前



第２図　周辺地形及び検出遺構（★連穴土坑，▲集石）

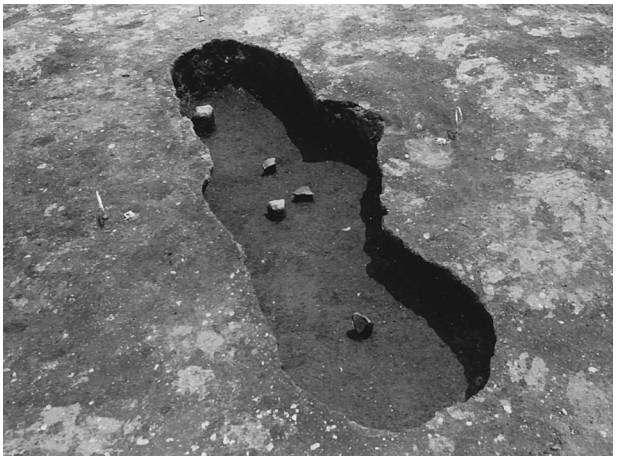


写真１　連穴土坑

写真２　政所式土器

期の曽畑式土器と轟式土器も数個体分ずつ出土した。この場所が東シナ海と鹿児島湾の丁度中間地点にあたることから，キャンプサイトとしての利用が高かったとも考えられる。

フミカキ遺跡で最も注目されたのは平織りの布目の圧痕をもつ土器である。縄文時代晩期の黒川式土器が数点出土したので，この時期のものであると考えられる。南九州では縄文時代晩期中半～弥生時代早期にかけて，組織痕土器と呼ばれる中華鍋形の土器が出土する。その組織痕には編布・網目・平織り等があるが，平織りは弥生時代早期に多い。通常は１㎝あたり経糸と緯糸が７本程度の平織りが多いのであるが，フミカキ遺跡出土の平織りは経糸・緯糸ともに１㎝あたり14本ずつが観察される。編布編みでも製作可能であるが，これまでの「織物は弥生時代に伝わった」という考え方に，一石を投じる可能性のあるものである。

特徴

縄文時代晩期の目の細かな平織りの布目圧痕は初例であり，縄文時代の衣服研究に刺激を与えた。また，縄文時代早期前葉の吉田式土器が政所式土器と共伴して出土したことと，石坂式土器よりも古いということが層位的に明らかとなった。

資料の所在

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「フミカキ遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』74

（東　和幸）

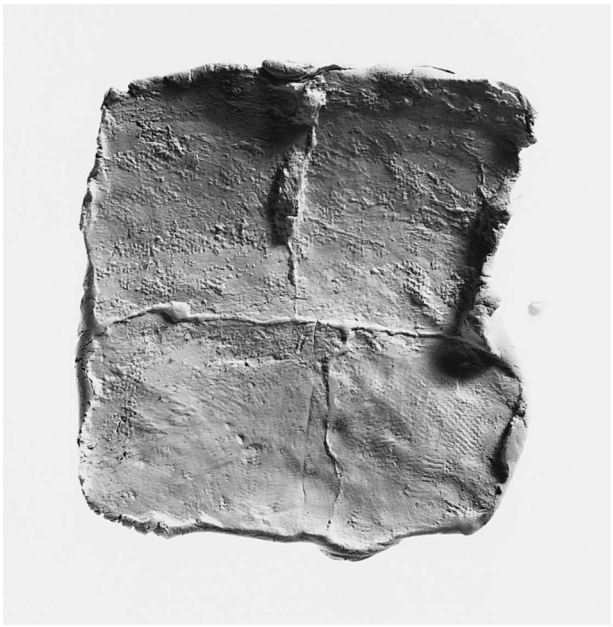


写真３　平織りの組織痕土器（右はモデリング）